看護大学生の口腔保健行動と口腔ケアへの関心、臨地実習での体験 -2023年度4年生への調査

桑村 由美[1)]　澄川 真珠子[2)]　上村 浩一[3)]
1）徳島大学大学院医歯薬学研究部看護学系、2）札幌医科大学保健医療学部、
3）兵庫県立大学看護学部

１．はじめに

口腔には、咬合、咀嚼、嚥下、発語・構音、顔の審美性、口腔内感覚（痛覚、温覚、冷覚、触覚）などの機能があり、生命の維持に加え、社会生活を営む上でも重要な役割を果たす。日常的な口腔ケアは看護師が実施している生活援助の１つであり、看護基礎教育時より、知識・技術の習得に向けた教育が行われている。A 大学では、2016 年度より、看護大学生を対象に口腔保健行動の実態や口腔ケアへの関心、臨地実習での体験について、調査を継続している。

本研究の目的は、看護大学生の口腔保健行動と口腔ケアへの関心、臨地実習での体験を明らかにし、今後の教育への示唆を得ることである。

２．方法

1）　調査対象

4 年制大学の看護師養成課程に在学中で、2023 年度看護統合実習を履修した学生を対象とした。

2）　調査方法

4 年間の総まとめの臨地実習となる看護統合実習の終了時の 2023 年 7 月に、自記式無記名の質問紙調査を実施した。

3）　調査項目

主な質問内容は、学生自身の「口腔保健行動や口腔内の状態（15 項目）」は 2 件法（はい・いいえ）、「大学 4 年間の臨地実習での口腔ケア体験（18 項目）」は 3 件法（指導の下での実施・見学・見学も実施もなし）で、「口腔や口腔ケアへの関心（16 項目）」と「口腔ケアの知識（12 項目）は 4 件法（とてもある・少しある・あまりない・全くない）/（とてもよく知っている・少し知っている・あまり知らない・全く知らない）で回答を得た。

4）　分析方法

2 群間の比較は Fisher の正確確率検定（両側）を用いた。統計解析は、IBM SPSS Statistics 25.0J for Windows を使用し、有意水準は 5%とした。

5）　倫理的配慮

研究協力者に、本研究への参加は自由意思とし、参加の有無が成績等には関係しないこと等を口頭および文書で説明した。本研究は、徳島大学病院生命科学・医学系研究倫理審査委員会の審査を経て、研究機関の長より許可を受けて実施した（申請番号 2329 - 8）。

３．結果

回答の得られた対象者は 60 名（回収率 87%）で、平均年齢は 21.5（標準偏差:0.7）歳であった。

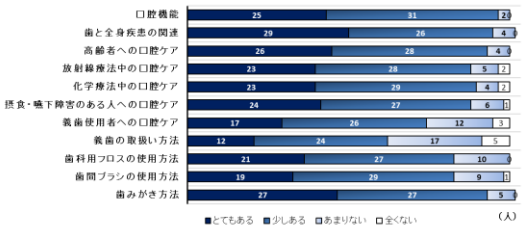
口腔保健行動では、自分の口腔内の観察を 52 名（87%）が実施し、歯 1 本ずつの丁寧な歯みがきは 42 名（70%）、歯と歯肉の境目の歯みがきは 51 名（85%）が実施し、歯間ブラシの利用は 21 名（35%）であった。1 年に 1 回以上の歯科健診の受診は 33 名（55%）、歯列矯正中/経験有は 18 名（30%）、かかりつけ歯科医院がある人は 45 名（75%）、歯みがき指導を受けた経験がある人は 63 名（60%）であった。

口腔内の状態は、歯みがき時の出血あり 20 名（33%）、口腔内の痛みあり 5 名（8%）であった。

口腔や口腔ケアへの関心に関して、「歯の健康への興味」が、とてもある 15 名（25%）、少しあ

る 34 名（57%）、あまりない 11 名（18%）であった。関心がとてもあると答えた具体的な項目は、多い順に、「歯と全身の関係」29 名（48%）、「歯みがき方法」27 名（45%）、「高齢者の口腔ケア」26 名（43%）、「口腔機能」25 名（42%）、「摂食嚥下障害のある人への口腔ケア」24 名（40%）、化学療法中の口腔ケア 23 名（38%）、放射線療法中の口腔ケア 23 名（38%）であった（図１）。「歯と全身疾患」に関心がある 55 名（93%）は、関心のない人に比べて、歯と歯肉の境目を磨き（p = 0.010）、定期的に歯科検診を受け（p = 0.039）、かかりつけの歯科医院があり（p＝0.047）、歯周病予防（p＝0.049）や虫歯予防（p＝0.049）や口腔ケアが生活の質の向上につながる（p＝0.019）などの知識が有意に多かった。

図１　口腔・口腔ケアへの関心

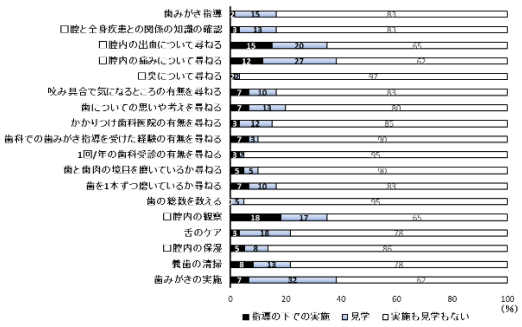


臨地実習での口腔ケア体験は、ほとんどの項目が「実施も見学もなし」であった（図２）。歯科医師の診察や歯科衛生士のケアの見学は 8 名（14%）/9 名（15%）、看護師と歯科医師/歯科衛生の情報交換の見学 8 名（14%）/ 6 名（10%）であった。

４．考察

2023 年度 4 年生は、入学時の 2020 年よりコロナ禍であり、コロナ禍の影響が大きい世代である。A 大学では、3 年次の領域別実習は 16 週間あり、最も長いが、このときに新型コロナウイルス感染症の位置づけが感染症法上、2 類相当であったため、実習内容に制限があった。4 年次の 2023 年 5 月に 5 類感染症移行となり、看護統合実習で、コロナ禍以前の実習体制にほぼ近い状態で実習が可能となった。そのため、過去の調査[1)]（歯みがき：指導の下での実施（2016～2019 年/2020～2021 年：36%/12%）、見学(40% /45%)、実施も見学もない(23%/43%)）と比べても体験が明らかに少ない。この背景には口腔ケア実施時に唾液飛沫曝露による感染の危険があるため、フェイスシールド等の個人防護具の適切な使用が必須となり、看護技術の難易度が高くなることの影響もあると考える。

図2　臨地実習での体験



令和 4 年度歯科疾患実態調査［20～24 歳女子：47.1%］と比べると、歯ブラシ以外の補助具を用いた歯間部清掃の割合は 35%と低かったが、歯科検診の受診率［20～24 歳：38.1%］は 55%と高かったため、歯科受診の際等に個別の状況に応じた補助具の使用方法を習得する必要があると考えられた。また、口腔や口腔ケアへの関心は高く、「歯と全身疾患」に関心のある人は、関連する知識が多く、口腔保健行動にも積極的に取組んでいることが推察された。これらは、看護実践の基盤であり、強みであると考える。看護大学生の持つ強みを活かしながら、臨地実習での体験が少ないことを踏まえて、口腔ケアを安全に実施できるための研鑽を積むことの重要性を伝えるなど、教育的支援を継続する必要性が示唆された。

謝辞

本研究の遂行にあたり、ご協力いただきました看護大学生の皆様にお礼を申し上げます。

引用文献

１）桑村由美,澄川真珠子：4 年次看護大学生の臨地実習での口腔ケア体験と口腔ケア教育への満足度　2016 年から 2019 年（コロナ禍前）と 2020 年から 2021 年（コロナ禍以降）の 6 年間の調査から,日本看護科学学会学術集会講演集 42 回 332-333,2022.